

漁る、といってもいろんな漁りがある。

人口に膾炙した漁りは、女漁りだろうが、ここではそういう難解な問題は扱わない。

トルストイの言葉から始める。

【私は近頃、日本に関する書籍を二三度読みましたが、日本がしきりに欧米文化の粕を漁っているのを知って、あまりいい気分がしない。古い古い二千年の歴史ある日本の文明をふりすてて欧米の文明を取り入れようとするのは、その取捨によほど注意を要します】

ここでトルストイが言っている「近頃」とは、日本では明治時代初期の話だ。

文明開化の時代だったのだから仕方ないではないか、と云う者がいたら（おそらく膨大な数いるだろうが）世界は必ず進化進歩発展し続けるという確信を抱いたオプチミストだ。

トルストイがペシミストだという話は別問題だろうが、トルストイの生きるロシアとも比較して考えながらの発言であったろう。

幕末から明治維新と続いた日本の歴史の流れのなかで、加えて「富国強兵」を国家の使命とした（せざるを得なかった）以上、「欧米文化の粕を漁る」のは当然の成り行きであったかに思われる。

従ってトルストイが「欧米文化の粕を漁る」のを批判するなら、明治国家そのものの存在を批判するべきだったのだろう。

『明治という国家』の司馬遼太郎に限らず、明治という時代を敬慕する文化人や政治家が多いけれども、「欧米文化の粕を漁る」しかなかった国家のどこを敬慕しているのか疑わしい。

たしかに明治の人間は至極大変で、明治の偉人たちはみな革新家だったと云ってもよい。

政治の革新、法制の革新、文化の革新、教育の革新、風俗の革新、芸術の革新、日常の革新。

けれどもここで、いささか時間を作って考えに耽らなければならないのは、果たして「革新」が国家や社会や人間にとって、素晴らしいこと

幸福なことで有るや否やという問題である。

はてさて。

ほんの一例だが、幕末において、「天誅」という名目でテロをやり続けた（いわば「革新」である）勤王の志士と、そのテロリスト達を抹殺しようとした（いわば「保守」である）新撰組と、その両者の関係は何度も検討すべき課題であると思われる。

昨今はますます複雑怪奇、奇妙奇天烈、笑止千万で、「保守」政党であるはずの自民党が、憲法改正という「革新」を盛んにやろうとしている。

いやはや。